

会員報告 第3班 平成23年3月28日(月)～4月3日(日)

○会社名 太啓建設株式会社 (報告会発表文から)

参加した方 (5人: <sup>うのとしかず</sup>宇野銀一 <sup>さかべとしお</sup>坂部利男 <sup>おおいしゆうや</sup>大石裕也 <sup>さわだたけし</sup>澤田剛士 <sup>まえだかずゆき</sup>前田和行

の皆さん)

それでは、東日本大震災復旧支援活動報告をさせていただきます。

報告に先立ち、今回の大震災で亡くなられた多くの方のご冥福をお祈りします。

まず、出勤要請ということで、派遣先は宮城県名取市及び東松島市付近ほかです。

派遣期間は23年3月28日からです。

派遣会員企業の方は、太啓建設株式会社5名、株式会社河村産業所4名、林本建設4名、株式会社ヒメノ2名、計15名です。

派遣先のルートということで、先発隊の情報がありましたので、福島原発の影響を避けるように、名古屋より中央道、国道113号等を経由して、走行距離で約700キロ。所要時間が10時間から12時間で、仙台西国道維持出張所へ入りました。

出発から到着までの苦労ということで、出発前に東北道の開通ということで、緊急車両の許可が取れずに不安での出発だった。

現地での情報がほとんどなく、不安であった。

放射能の影響があるか、心配だった。

余震があり、津波が心配であった。

とにかく、不安、心配での出発。津波、余震が心配でした。

主要派遣場所ということで、作業内容は仙台空港アクセス線の水かき作業、東松島市赤江地区、大曲地区での水かき作業、大崎市での照明作業でした。

現地での状況写真です。これは、左側が仙台空港アクセス線ということで、水かきの状況写真です。アクセス線の方のボックスの延長が約560メートル、幅が5.35、高さが6.05、深さでいうと約7メートルの所です。

水かき状況写真。下に降りたときの写真ですけど、水位低下に伴って、ポンプのゴミ取り、ポンプの移動を行なっています。実際ポンプが上の方にある場合は現地で、ゴミが集まるといけないので、網とかを災害に遭ったものを現地で調達して、それを加工しながら、ゴミが入らないような工夫もしております。

半日以上、水の中で作業しているとやっぱり足腰が冷えますので、高さ7メートルの所、アップスライダー等をつなぎ合わせた梯子なんですけど、それを登るのに大変苦労しました。落ちるんじゃないかという危険性もちよっとありました。

これも写真なんですけど、左側のボックスの天端以上に水位があったのですが、最終日には線路敷が見えるようになりました。概算の排出量で約2万立米と聞いています。

次に、東松島市の被災状況写真です。これも同じく、東松島市での水かき状況です。24時間の連続作業で、3交代制で行なったそうです。

これも同じく排水状況の写真です。右側の方が定点での夜間の水位観測状況です。24時間ですので、水位を測りながら作業をしているというような格好です。

現地到着後の印象、作業中の苦労ということで、津波被害の恐ろしさを現地で目の当たりにして再認識しました。

多くの犠牲者が出たと聞きましたので、胸が痛くなった。

土地の高低、高速道路の海側・山側ということで津波被害の差がすごく激しかったです。特撮現場のような惨状であった。

昼夜問わず作業があり、睡眠不足になった。

水が冷たく、足腰が冷え、体調管理するのが難しかった。

担当車両の車両保険が気がかりであった。

必要な資材がなく、現地調達が難しかった。実際、食料を持っていった業者もあれば、足りなかったという業者もありますので、こういう話が出ております。

支援を終えての感想ということで、災害支援した場所の情報が気になります。

この地区での大地震対策の見直しが必要ではないか。大地震が起きた場合の訓練が必要等意見がありました。この中でも、仙台市では大地震が起きた場合の訓練、訓練での反省会を行っていたので、いち早く災害復旧を進められた場所があったと聞いています。

不況の時代ですけれども、いち早く行動に移せるのが建設業であると思います。

今回の東日本大震災で被災された方の一日も早い復興をお祈りします。

と同時に、今回、支援をする上でたくさんの方々にご協力いただいたことを感謝いたします。

また、現地支援を行なう上で、情報伝達ができない場合どうするのか等の多くの問題がわかったと思います。以上で報告を終わらせていただきます。

## ○会社名 林本建設株式会社

参加した方（ 4人： にしべきみひこ 西部公彦 かりやきょうじ 荻谷恭司 たなかかずお 田中和夫 かさい 葛西 まもる 守の皆さん）

現地についてすぐ思ったことは、報道等で、映るものとは、想像絶する惨状で、言葉にならない状況でした。

まるで、特撮映画のような状態、生きていくのに、必死な形相した顔、遺体安置所や、仮埋葬等の場所を目の当たりにすると、軽々しく、頑張ってくださいとか、大変ですねとか、言えないような雰囲気でした。まだ3月ということで、雪が降り氷点下での作業は、寒さに不慣れな私達にとっては非情に厳しいものでした。24時間体制で、3交替での作業でしたので、睡眠不足気味にもなり、毎日数回ある余震に、怯えながらでの作業でした。外部からの情報を、耳にしていますが、地名がわからないので、道路地図片手に聴いていました。我々の作業場所は、海岸から3キロ離れているところでしたが、津波の影響が、かなり有ることが、わかる程でした。

現地に行くまでの準備段階での情報の少ないので、行く側とすれば、かなりの不安で、協会、国土交通省の方で、あの状況では、大変かとは、と思いますが、情報をもっと頂きたいと思いました。事前説明会での、国土交通省の説明では、ほとんどが、現地に聞いて下さいとか、作業場所も、庄内川河川事務所が、把握を余りされていないように見受けました。国土交通省内の連絡が、不徹底で、他のメンバーからは、行く事を阻む方もいて、行く前から、モチベーションが、下がるような感じでした。現地でも、連絡が不徹底で、待機時間が長かったり、補給が来なかったりして、無駄な時間を過ごしたような感じで、こんな事ぐらい素早く対応してほしいことが、多々ありました。しかし、ほんの微みたる事を、復興に協力出来、携われた事を誇りに思う半面、それぐらいの事しか携われない自分達が、情けないやら悔しいやら、残念で仕方ありません。まだまだ十分何かをやることがあるとは思いますが、今の所、どうして良いかわからず、自分の今の実力なんだと思います。まだまだ復興には、時間が掛かるとは思いますが、1日でも早く、東北地方、そして日本全体が、元気で、元に戻ればと願っております。

## ○会社名 株式会社 河村産業所

参加した方（4人：<sup>いしかわ</sup>石川 <sup>よしみ</sup>好 <sup>かめおかとしや</sup>亀岡俊八 <sup>まつおかたかお</sup>松岡高男 <sup>さくらいさとみ</sup>櫻井仁美 の皆さん）

報告に先立ち、まずは今回の東日本大震災にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、犠牲になられた方々のご遺族の皆様に対し、深くお悔やみ申し上げます。

### 1、出動要請について

1)派遣先 宮城県東松島市付近

2)派遣期間 平成23年3月28日～4月4日まで（派遣先での支援活動は、平成23年3月29日～4月3日までの6日間）

### 2、派遣先までのルート

先遣隊の情報より、福島原発の影響を避けるように名古屋より 中央道・国道113号・等を経由し走行距離で約700km、所要時間約12時間で、仙台（仙台西国道維持出張所）へ入りました。

### 3、出発から到着までの苦勞

1)緊急車両の許可が得られず（常磐道が出発前に規制解除されて）、道中不安を抱えての出発でした。

2)現地での情報・状況がほとんど無く、準備資器材等も含め不安であった。

3)福島原発（放射能）の影響がどこまで及んでいるかわからず心配だった。

4)津波・余震の影響が分らず心配でした。

5)とにかく不安・心配を抱いての出発でした。

### 4、現地到着後の印象・作業中の苦勞

1)津波被害の甚大さ（恐ろしさ）を再認識した。

- 2)多くの犠牲者が出たと聞き、息苦しさを感じた。
- 3)土地の高低差で、津波被害の差が激しかった。
- 4)昼夜問わずの作業（車両及びポンプ管理）があり、期間中熟睡できず睡眠不足でした。
- 5)排水ポンプのゴミ除去時、水が冷たく、足腰が冷え体調管理が難しかった。
- 6)必要な資器材がなく、現地調達が難しかった。

#### 5、災害支援を終えての感想

- 1)災害支援をした地域が今現在どこまで復興しているか。少しでも早く元の生活に戻ってほしい。
- 2)この地域（東海地方）でも大地震に対する備え・見直しが必要ではないでしょうか。

各人の心構え・家族等との連絡方法や学校・会社からの帰宅方法などを今一度家族間で話し合ってもらいたいと思う。何れこの地域にも大災害が予想されますが、発生しても被害が少なくなるように願います。

以上にて報告を終わります。

## ○会社名 株式会社ヒメノ

参加した方（2人：<sup>みね</sup> 峯 <sup>まさよし</sup> 昌利 <sup>やましたゆうじ</sup> 山下優二 の皆さん）

今回の災害復旧支援は出発の3日前の要請であったため、現地での作業内容等を会社の上層部が検討し参加メンバーの一員に選ばれました。支援活動は第3班（3月28日から4月4日の実支援活動は6日）であり、現地の情報も多少はあったが、ほとんどが調達する物資などの情報で、余震や原発事故による影響の情報はなく支援活動に参加する事を家族に伝え説得しなければならないが、震災の発生時よりメディア等から流れてくる映像等で現地の惨状を見ているため即答は得られず、自分自身も不安だったのは事実です。

出発の当日は原発事故の影響を考慮し中央道より日本海側から仙台入りし、維持出張所で現状及び注意事項の説明を受け各活動場所へと向かいました。

当社の活動場所は仙台より北にある大崎市古川湊尻の江合川堤防決壊現場で照明車を操作し夜間作業を支援するとの事であったが、到着の当日のみで夜間作業は終わり翌日からは照明車の移動と待機の繰り返しで、実際の活動内容がどれだけの支援になったかを考えると少々恥ずかしい気持ちにもなります。

しかし宮城県内の災害復旧支援活動現場を照明車で移動した事が、逆に津波で実際に震災に遭われた方々と接する機会を多くしてくれたのも事実です。中でもコンビニで昼食を購入しようとした時に支援活動で来ていた他県の作業員の方たちが、順番待ちをしていた親子に順番を譲り自分達が実際に購入できなかった時「自分達はこの支援活動が終わるまでの辛抱だからね」と笑顔でリンゴとお水だけ購入して空腹を満たしていた事や、石巻で日用品や雑貨をセールしていた店主の方が「困った時はお互い様だから」と自分のお店も海水に浸かり大変なのに明るく気丈に商売していた事、またメディア等では知る事のできな

い小さな町の被災状況など現地で色々な震災後を見る事ができたのは貴重な経験であり今でも印象に残っています。

また同時に、私たちの住む東海地方は大きな地震がいつ発生してもおかしくない地域で、今回は支援をする側でしたが今後いつ支援を受ける側の立場になるか分かりません。その地域で生活し建設業に関わる者として、微力ではありましたが今回の支援活動に参加できた事は誇りに思います。

そして支援活動を通じて知り合った被災地の方々からは、東北地方が3月11日の地震発生から今迄も、そして今後も最大の地震には最大のエネルギーで復興に向かって進んで行く強さを学ばしてもらった事は、今回の災害復旧支援に参加して一番強く感じたと同時に自身の今迄の物事に対する甘い考えを改めさせられた事であったと思っています。

「がんばろう 東北！」今は一日でも早く、東北地方が復興する事を心より願って参加した感想とさせていただきます。

#### (各社の活動)

